僕の太陽が凍ってゆく

酒井晃

同時代叢書

汐文社

同時代叢書

僕の太陽が凍ってゆく

酒井 晃

汐文社

著者　酒井　晃

1936年京都府生まれ
現在，京都市在住
酒井診療所所長
京都市学校医会常任理事

僕の太陽が凍ってゆく　　同時代叢書

1977年9月10日　初版第一刷発行
1977年10月30日　初版第二刷発行

著　者　酒　井　晃

発行者　吉　元　尊　則

発　行　所　株式会社　汐　文　社

東京都文京区本郷1-26-10 中村ビル
03—815—8421～4

印刷　東洋印刷株式会社　　製本　東京美術紙工

まえがき

一

昭和四九年の二月中旬のことであった。

地元紙の三面記事に若者の自殺の報道があるのが、私の目にとまった。それはごく小さな扱いで大きな問題提起として取り上げられているふうでもなかったし、その当時から、こうした若者の自殺は目に見えて増加していたので、ああ、またかぐらいの印象であった。

しかし、私はその記事を読んで、ちょっとひっかかる気持になった。

見出しは、

重い……入試地獄

とあった。そして記事の最後の一節は、

背中に英語の辞書や受験参考書など八キロを背負って死んでいた

と報じていた。

彼が背負った八キロの重み、この八キロが本当に受験参考書でなければならなかったのか。ある

いは、彼の歩んできた一八年の人生の最後の象徴としての存在であったのか。いずれにしても、私たち生きつづけている人間にとって死を選んだ人間は、どう理屈づけても人生の敗北者として映るものではある。しかし、自殺という行為に関わりあった人々がどのように受けとめ、どのように対処したか。さらに、自殺した人が死んでまで訴えたかったことは一体、何だったのか。

ちょうどその頃、正確には昭和四六年頃から、私は現代社会に生きる少年の姿を、主に社会の病根を少年の姿を通じて映像化していた。題して「少年問題シリーズ」。

すでに「シンナー遊び」、「不純異性交遊と性病」をテーマに一六ミリで完成していた。そして、次の企画素材を求めていた私にとって、この少年の八キロの受験書の重さは決定的な力を持っていた。できることなら、この少年の絡まった心の糸を解くことによって、せめて生きている私たちには何か今後の糧となり得ないものか。

数ヵ月を経て、私はそんな気持と願いをこめて松倉家（仮名）を訪れた。この闖入者に対し、お母さんは終始、落着いて親切な応対をして下さった。そして、その対話の間中、この聡明な母親を持ちながら、なぜ彼が死を選ばねばならなかったのか、そればかりが脳裡を離れなかった。

私が最も感激したのは、彼の日記を見せていただけたことであった。

「息子と同じ世代の人々やご両親に、少しでもお役に立つのでしたら、どうぞ」

この一言は、私には大きな勇気を与えてくれたと同時に、重大な責任を受け取った気持になった。

彼の日記の中で印象的な二句があった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「自分は尊敬する人の俗物化した姿をみた」
というのと、
「自分が死ぬのは自分が弱いからです」
というくだりであった。
尊敬する人物が誰であったのかわからないが、とにかく、彼は裏切られたと言っている。友人、先生、両親、知名人……。
はたして、その人物が本当の意味で尊敬に値する人物だったのか。思春期一流のロマンチシズムのなせる業で、実は虚像だったのではなかったのか。もし、彼が心から尊敬した人物そのものであったのなら、彼は本当に日本一不幸な人であったと思うし、また、俗物を偶像視した結果の死であったのなら、犬死と言わざるを得ない。
さらに、自分の弱さを公言した死の型をとっているのも悲劇であると思った。過当競争の結果、弱い者が脱落するのは当然のことだが、その弱さをあえて表明し、その弱いはずの人が大勇気の必要な自殺を遂行していることに、現代若者の一つの姿を見るような気がするのである。
もし、被害者、加害者という言葉を用いればどちらがどうなるのであろう。あるいは、どちらも被害者なのであろうか。

その後しばらくして、京都はさる名刹のお堂で、一〇代の若者と我々常識人なる大人とが、若者

の「死に急ぎ」について、延々四時間、時の立つのも忘れて座談会を行なった。

型通りのたてまえ論から始まって、肯定論、否定論、はては禅問答にまで発展した。そして、彼らの発した言葉の流れに、三つのタイプがあるのに気づいた。

① 乳母車で幼稚園へほうり込まれてから、教育ママの敷いたレールに乗って現在まで来た。自分のために勉強をしているということよりも、よい点をとった時のママの顔をみることに一種の快感をおぼえる。だから、ママからほうり出されたらどのようにして生きてゆこうかと心配である。

② 毎日毎日、朝、目がさめると一日、何をして過ごそうかと考えるのに苦労する。ゴロゴロするのも努力が要る、デートをするのも面倒くさい。もちろん、勉強なんてお呼びじゃない。だからといって、死ぬなんてさらに面倒くさいだろう。

そして最後にA君の言ったタイプ。

③ 自分は肯定も否定もしない。また、現代に生まれたことに対する自己弁護的な言葉もない。ちょっとした虚無主義者、大人の言う無感動主義者かも知れない。ただ、本日のテーマに対して言えることは、いずれにしても自分の命だから、最終的な決定権は自分で持ちたいし、僕はそうします。

つまり、なぜ彼らが死ぬのかを第三者がとやかく言う筋合いのものではない、という若者の居直り像ともみえたし、理論づけばかりしたがる我々大人への挑戦とも聞こえた。

後日、当日の感想文を整理していたらB子がこんなことを書いていた。

「大人が気取らずに、大人ぶらずに対話して下さったのがとても印象的、感動的でした。私たちだけで、学校でこんなにいい雰囲気で座談会ができないのが淋しい」と。

これを当日出席されたC氏に見せたところ、C氏曰く、

「へえ、あの程度でねえ。俺たちは普通に話し合っただけなのにねえ」

と言った。

私は何でもないこの二人、B子とC氏の言葉に再び考え込んでしまった。

つまり、今の学校教育は、以前に比べて教師・生徒間の距離がなくなり（悪くいえば、先生の値打ちが下がり）、いかにも友人のように見えるのに、肝心なところではたてまえだけの水くさいものになっているのかな、とそれこそ淋しい気がした。もちろん、これは一般論であって、すべてがそうだとは思わないけれど……。

これらの資料、体験をもとにして映画制作の取材、準備をはじめた。

【昭和四九年度】

中・高校生の自殺について

▼総　数

中学生　六九人（男四六人　女二三人）

高校生　二〇八人（男一三三人　女　七五人）

▼県　別

中学生　北海道、岐阜、兵庫の各五人が第一位。

高校生　北海道一九人、兵庫一五人、大阪一四人の順。

皆無は岩手、鳥取、徳島、宮崎。

▼月　別

中学生　八月、九月の順。

高校生　四月、五月、九月、一〇月の順。

▼原　因

中学生　(1)家庭の事情　(2)進路問題　(3)厭世　(4)学業不振

高校生　(1)精神障害　(2)厭世　(3)家庭の事情　(4)進路問題　(5)異性問題

例えば、こんな統計を眺めて分析・考察を加えた。数字は動かぬ事実である。信用するより他はない。しかし、実際にはもっとあるんではないだろうか。陰の範囲で処理されてしまっているケー

スも多くあるだろう。また、自殺よりも悲惨な結果で終わっている事件もあるはずだ。原因にしても、こう簡単にそれぞれのケースがあてはまるものでもあるまい。自殺に至る直接動機と自殺準備状態の間には、函数関係が成り立っていて互いに力を働きかけているから、いわゆるマスコミで取り上げられていた見出しが、必ずしもその人の真意であるかどうかは、はなはだ疑問が多い。

あれこれ愚考の末、私は松倉晃宏君の人物像をイメージ・アップしていった。

日記は事実である。彼の環境についても、できるだけ克明に調査した。人間松倉君についても、交友関係や彼の知人から話を聞かせてもらった。そして、そのうえで、その状況をできるだけ再現して原案ができ上がった。

ドラマの部分が日記の部分にどれだけ近づけたか。彼の心境がどの程度、言えているのか。

映画は主にドラマの部分で展開され、私のよき理解者、松尾正武氏、羽田辰治氏をはじめとする素晴しき仲間と力をあわせて取り組み完成。地域社会でのこの問題に関与する人々に、それなりの説得と示唆を与え得たことは大きな喜びとなった。そして今、私は思う。

もしどこかで、ある若者がこの映画をひょんなはずみでみて、

「やっぱり死ぬの、やーめた」

と言ってくれたら、私は日本一幸せな男になれるんだが。とりあえず一人でいい。そんな若者にめぐりあいたくて……。

二

だれかがおぼれている
だんだんおぼれてしずんでいく
……

この詩を手にした時の驚きと興奮を、私は今もはっきりとおぼえている。それは、いきなり後頭部を叩かれたような大きな衝撃であった。

中学校一年生が作文の時間に、いとも簡単に書いてのけたものだという。

その発想の鋭さ。

その表現力の確かさ。

その中味の濃さ。

大人たる自分が劣等感を持たざるを得なかった。

私はこの詩にすっかり惚れこんでしまった。そしてこの少年を思いやった。顔もみたこともない吉村信男君（仮名）に、一目も見ぬうちに一目惚れしてしまったというのが、偽らざる心境であった。

吉村君の描いたこの「ゆめの予定」という世界。この世界は一体、何なのだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本当に純粋に彼が描いたゆめだけの世界なのか。
ある意図を持ってそれを意識しながら描いたゆめの世界なのか。
いや、きっと彼はすでに立派な詩人なのだろう。
そんなことはどうでもいい。ただ、彼が投げた一つの小石、この何でもない小石が現代の大人の世界という池にとび込んだ時、これが大きな波紋を生ずるのは必然である。
つまり、書かれた瞬間からこの詩は、この少年の手を離れて一人歩きをはじめた。そして、触れた人はみんな、何かを感じそして深刻な表情となった。
吉村君の担任の先生は、
「いやあ、詩に書く子は大丈夫です。書くことによって自分を昇華してしまいますからね。むしろ、危いのは何も言わずに黙っている子ですね。そういう子は突然、思いがけないことをしでかすものですよ」
現に吉村君は、成績は優秀な子である。家庭環境にも問題はない。少なくとも第三者には、申し分のない子として映るタイプだという。
〈だという〉と言うのは、私は吉村君とは会っていないし、これからも会わないであろうからである。私の心のなかには、吉村君の人物像はできてしまっている。今さら、会って
「僕、吉村信男です」
と言われて、もし私の考えている吉村君とまったく違った少年が目の前に現われたら、私は思わ

ず、言いそうだからである。

「違うでしょう、君は吉村君じゃないでしょう」

と。それと同時に、この少年をわずらわしい大人の世界にまき込んで、あたら優れた才能の芽をつんでしまうのも酷だと思ったからでもある。

私は、彼の描いた詩のイメージは確かに欲しい。そして、ここから多くの問題を大人流に提起して、建設的な考えへの材料として扱わせて欲しい。吉村君としては、今のままで成長して欲しい。その姿を私は側面からただ黙って見つづけていたい。そんな虫のいい発想が幸い許されて、ここに「ゆめの予定」という詩のみが一つの人格を持って登場したわけである。

私たちの映像グループは早速、このイメージから映画化する準備をした。度重なる討論と考察検討の後、島田開氏のシナリオにて制作に入り、作り出された作品はこれまた、反響を呼んだ。少年の心の奥にひそんだ深層心理とでもいうものが、純粋さ、無邪気さゆえにストレートに表現された時、それはすさまじい破壊力でシュールリアリズムの世界へと我々を追い込んでゆくのであった。

三

僕の太陽が凍ってゆく、と言って死んでいった松倉晃宏君。

だれかがおぼれている、と叫んだ吉村信男君。

この二人を眺めてみる時、現代社会への痛烈な告発として私には迫ってくる。

即ち、神武景気に始まって、消費至上主義、生産第一・大企業優先と物質戦争大勝利に沸いた年代に生を授かり、この世を生き抜くには学閥出世あるのみ、と父親の一見無干渉風のゆえか教育権を握った母親によって育てられた子どもたちが、受験勉強のために、友情を忘れ、親友を失い、あげくの果てに、希望という名のはずだった列車の辿りついた駅が、絶望という名にすり替っていたとすれば……。

彼らが再び友情をはぐくみ合い、真の意味での教育の正道を歩める日が、いつの日か来るのであろうか。

大きいことが大きいとはかぎらない。

小さなことが小さいともかぎらない。

こんなことを、しっかりと胸に抱きとめて歩いてくれる日が訪れるのであろうか。

目次

まえがき 1
序 17
第一部 僕の太陽が凍ってゆく……21
プロローグ……22
第一章 彷徨える雛……26
家庭 26
日記（1） 34
青春 44
第二章 ピエロの夏……52
証言I 52
日記（2） 59
恋慕 73

第三章　秋の招待券……87
証言Ⅱ　87
日記（3）　92
孤独　99
波紋　102
日記（4）　108
第四章　粉雪が舞う……119
重圧　119
日記（5）　125
交錯　135
日記（6）　140
焦燥　141
日記（7）　151
終章　どこかにゆきたかった……157
証言Ⅲ　157
遺言　164
付記……167

ある老人との対話 167
ある青年との対話 175
第二部　ゆめの予定……183
あとがき 220

装幀　西口英介

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com